

三加和町文化財調査報告 第14集

田中城跡

XIII

1998

熊本県玉名郡
三加和町教育委員会

三加和町文化財調査報告 第14集

田中城跡

XIII

1998

熊本県玉名郡

三加和町教育委員会

序

一昨年、玉名市の柳町遺跡で日本最古の文字、菊鹿町の鞠智城での貯木場や木簡の発見と大きな話題が続きましたが、今年度になっても、同じく鞠智城からの県内最古の瓦の出土、人吉城での地下室の発見のほか佐敷城の整備が進むなど考古学関連のニュースがマスコミを賑わしました。

一方、田中城においては、昨年度、専門調査委員の方々のご協力を得て、田中城跡発掘調査10年分の報告書を刊行することができました。しかし、田中城の全体像を解明するには、まだまだ分からないことが多々あります。

田中城の発掘調査は昭和61年度から継続して行っていますが、当初は、田中城についてほとんど資料もなく、全く手探り状態での取りかかりでした。平成元年12月、山口県立文書館での『迎春・和仁仕寄陣取図』の発見以来、この絵図に沿った調査を行うようになりました。その結果、城に関するいろいろな遺構が確認され、絵図の信憑性が高まるとともに田中城に対する関心も高まってきたようです。

今年度の調査でも、塹壕跡・非常用通路と思われる遺構が確認され、また、鉛製の鉄砲玉が18個も出土するなど当時の戦いの激しさがうかがわれました。

今後も、調査により「田中城跡全体像解明」が進むことに期待が持たれますので、関係諸庁・機関および地元の方々にはこれまで以上にお世話になると思いますが、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

平成10年3月

三加和町教育長 今村 憲夫

例 言

1. 本書は熊本県玉名郡三加和町が「田中城総合整備計画」の一環として、平成9年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本調査は、国庫・県費補助事業として三加和町教育委員会が実施し、黒田裕司がその任にあたった。
3. 遺物及び遺構の実測・製図・拓本・写真撮影は黒田が行った。
4. 調査の方法・遺物に関しては、専門調査委員のご教示を得た。
5. 出土遺物は、三加和町教育委員会で保管している。
6. 本書の執筆・編集は黒田が担当した。

本文目次

第Ⅰ章 序説	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査組織	1
第3節 調査計画	2
第Ⅱ章 調査の成果	6
第1節 調査の概要	6
第2節 遺構と遺物	9
[Ⅰ区]	9
(1) 遺構	9
(2) 遺物	9
[Ⅱ区]	10
(1) 遺構	10
① 柱穴	10
② 塹壕跡	10
③ 通路跡?	10
(2) 土層	10
① Iトレンチ	10
② IIトレンチ	13
③ IIIトレンチ	13
④ IVトレンチ(塹壕跡)	13
(2) 遺物	13
第Ⅲ章 まとめ	15
報告書抄録	23

挿図目次

第1図 田中城跡全体図	5
第2図 遺構配置図	7
第3図 I-2区出土遺物実測図	9
第4図 I-2区出土鉄砲玉実測図	9

第5図	塹壕跡実測図	11
第6図	I～IIIトレンチ土層断面図	12
第7図	II-3区出土遺物実測図	14
第8図	II-1・3区出土鉄砲玉実測図	15

写 真 図 版 目 次

図版1	(1) 調査地遠景(南西より)	(2) I区調査前(南東より)
	(3) I-2区表土除去状況(南東より)	
図版2	(1) II区調査前(南東より)	(2) II-1区遺構確認状況(南東より)
	(3) II-1区遺構発掘状況(南東より)	
図版3	(1) II-3区岩盤確認状況(北より)	(2) II-3区遺構発掘状況(北東より)
	(3) 塹壕跡東半分発掘状況(北西より)	(4) 通路跡?発掘状況(北より)
図版4	(1) 投弾?出土状況	(2) すり鉢出土状況
	(3) 鉄砲玉出土状況	(4) 出土鉄砲玉

第 I 章 序 説

第 1 節 調査に至る経過

昭和61年度に調査を始めて以来、貴重な遺構や新しい遺構の発見が続いている。『辺春・和仁仕寄陣取図』の発見以来、城の西側を中心に調査を続けてきており、連棟式建物跡・やぐら跡などいろいろな遺構が確認され、陣取図の信憑性が高まってくるとともに、弾正屋敷跡と言伝えられている箇所からは井戸跡が発見され、何らかの生活域だったことも推測された。

主郭部の南側斜面には、弾正屋敷跡と言伝えのある平場のほか、やや広めの平場が数段にわたって形成されている。今年度の調査区は、主郭部分を取り巻く空堀の南側の端が竪堀状に落ち込んだ部分に形成されている、幅は狭いが非常に細長い三段の平坦部である。主郭の裾部に当たり、先端に石籠が掘られていた主郭から南西方向に延びる尾根と昨年度の調査で「やぐら跡」が確認された南側に延びる尾根に挟まれた非常に狭い谷状部分で、和仁側の防御施設が形成されている可能性が考えられる箇所である。また、空堀との関係も含め重要な位置になると推測し調査を行うこととした。

第 2 節 調査組織

- 調査主体 三加和町教育委員会
- 調査責任者 今村 憲夫（三加和町教育長）
- 調査事務 小山 暁（社会教育課課長）
荒木 和富（社会教育主事・参事）
- 調査員 黒田 裕司（社会教育課参事）
- 専門調査委員 石井 進（東京大学名誉教授）
大三輪龍彦（鶴見大学文学部教授）
田邊 哲夫（玉名市立歴史博物館館長）
北野 隆（熊本大学工学部教授）
阿蘇品保夫（八代市立博物館館長）
大田 幸博（熊本県文化課主幹）
- 発掘作業員 靄 浅代・靄 邦代・靄 サカエ・靄 敦子・池田ゆみ子
- 調査協力者 工藤 敬一（熊本大学文学部教授）・中村幸史郎（山鹿市立博物館副館長）
中井 均（米原町教育委員会）・松田 直則（高知県埋蔵文化財センター）

第3節 調査経過

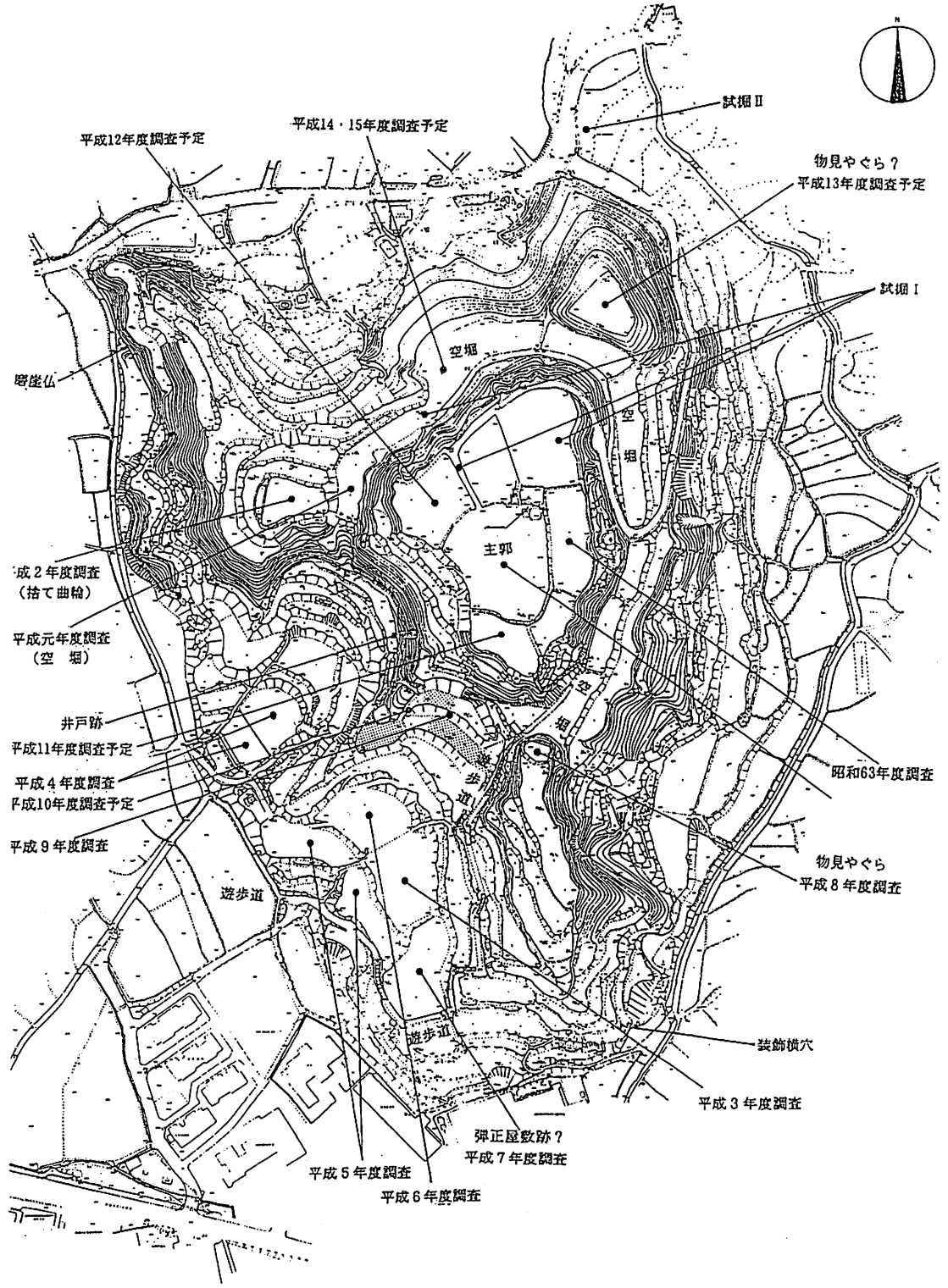
- 3月9日 広島県新市町視察。(15名)
19日 下益城郡小川町分館長視察。
26日 西合志町合生文化会館「歴史・史跡探訪」視察。
- 5月21日 熊本市羽田長寿会见学。(20名)
- 6月5日 佐々成政ゆかりの会視察。(17名)
国衆一揆顕彰会議総会。
- 10月1日 プレハブ建設。
6日 発掘調査開始。
調査予定区が三段に分かれているため、上の段からⅠ・Ⅱ・Ⅲ区とし、真中のⅡ区から調査を行うことにする。細長い段のため、排土場の関係で東側からさらに三分割してⅡ-1・Ⅱ-2・Ⅱ-3区とし調査を行うこととし、Ⅱ-1区から表土剥ぎを始める。
- 15日 北側の山付き部分からのみ、地山を思わせる土が確認されつつあり、水が沁みだしてくる。今のところ、遺構は確認されない。
- 21日 郷土史講座受講生見学。(8名)
春富保育園遠足。
- 22日 精査を繰り返すが、なかなか遺構確認までには至らない。
- 24日 遺構検出を継続したが、土色がイマイチはっきりしないので、中央部にトレンチ(Ⅱトレ)を入れて土層の確認を行うこととした。主郭側では、地山の確認ができていたので、これを追うことにしたが、次第に傾斜していくので北西-南東方向に走る堀状の遺構があるのかもいれない。埋土は、凝灰岩の小塊が層を成している。
- 27日 主郭側で確認された地山から、柵列と思われる柱穴が検出された。
- 28日 遺構を掘り始める。
土層確認のため、東側にもう一本トレンチ(Ⅰトレ)を入れる。
- 29日 ⅠトレもⅠトレ同様、地山が急激に落ち込んでいる。
- 30日 堀跡と想定した場合の対岸がでず、堀跡ではないことを確認。地山の傾斜は、下の段まで続いていると思われる。地山を整形したあと、空堀を掘った土や上の段を削り出した際に出た土で整地して平場を伸ばしているのかもしれない。
- 31日 Ⅱ-3区の表土剥ぎを始める。

- 11月 5日 熊本県広報誌「彩り」取材。
Ⅱ－1区で確認した柱穴を掘ったが、あまり深くなく、簡単な柵と思われる。
- 7日 Ⅱ－1区の遺構発掘写真撮影。
- 11日 Ⅱ区の実測用杭打ち。
Ⅱ－3区の遺構確認を行ったが、東側半分から凝灰岩の岩盤が確認されただけで、遺構は見当たらないようである。
- 13日 岩盤の凝灰岩には全く遺構はなく、整地で平場を延ばしたと思われる箇所から、柱穴・土壌が確認された。
- 14日 I－2区の表土剥ぎを始める。
- 19日 表土が厚く、なかなか遺構確認面まで至らない。
- 26日 数日雨が降り続き、作業が困難となる。
- 12月 4日 ようやく遺構確認面に到達。表土から深いところで約1mもあり、かなりの崩落が推定される。
鉛製鉄砲玉2個出土。
Ⅱ－1区遺構実測(1/20)
- 7日 鳥栖市教育委員会見学。(35名)
- 9日 Ⅱ－1区の埋め戻しを始める。
- 18日 Ⅱ－3区の東側で確認された凝灰岩の岩盤の状態を確認するため、トレンチを入れてみたところ犬走りのな段が確認された。
- 19日 昨日のトレンチを延長したところ対岸が確認され、堀切の可能性が出てきた。幅約3m、深さ約1mの逆台形をしており、両側に犬走りのな段を持つ。
- 22日 町文化財保護委員視察。(5名)
年内の調査終了。

平成10年

- 1月 5日 調査再開。
Ⅱ－3区の堀切を専門調査委員に見てもらうため、当分は埋め戻しを行わないことにした。そのため、作業段取りを変更して、Ⅱ－2区をさらに2と2'に二分割して調査を行うことにする。
- 13日 Ⅱ－1区と同様に黄褐色をした地山の土を確認。
- 19日 遺構は全く確認できない。
- 21日 中央部に土層確認のためのトレンチ(幅1m)を入れる。
熊本県派遣社会教育主事(スポーツ担当)、研修会の後見学。(12名)

- 26日 I-2区の掘り方が足りないように思われたため、もう少し掘り下げて遺構の確認をすることにする。
- 30日 I-2区から鉛製鉄砲玉が4個出土。そのうちの1個は、径が2cm弱もあり、今まで出土したなかでは最大のものである。しかし、遺構は全く確認できない。
- 2月11日 「第21回戦国肥後国衆まつり」での来町者が多数見学に訪れる。
- 16日 I-2区の埋め戻しを始める。
- 18日 中井 均（滋賀県米原町教育委員会）・松田 直則（高知県埋蔵文化財センター）氏視察。
- 19日 山鹿市平小城地区公民館長見学。（16名）
- 23日 小国郷史談会視察。（16名）
- 26日 植木町文化財保護委員視察。（11名）
- 3月5日 石井・田邊・北野・大田先生を招いて専門調査委員会を行う。
II-3区で確認された遺構を掘切としていたが、塹壕跡と判断した方が良からうとのことであり、主郭側で確認した凝灰岩の塊は投弾の可能性があるとの指摘を受けた。なお、トレンチ掘りでの確認のため、全体像がとらえられていないので、発掘面積をもう少し広めるよう指示があった。また塹壕跡の東側の凝灰岩に残る溝状の痕跡は、非常用の連絡路ではないかとの指摘も受けた。
出土遺物では、実射されたと見られる潰れた鉛の塊も確認され、今年度の鉛製鉄砲玉の出土数は13個となった。
- 6日 山鹿市考古学講座受講生見学。（15名）
- 16日 14個目の鉄砲玉出土。
- 18日 塹壕跡の東側部分を拡張しているが、通路と思われる遺構とはつながっておらず切れている。主郭側の平場には、投弾と思われる凝灰岩の塊が多数見られる。
- 23日 西側部分を拡張。東側に比べて幅広く、やや深くなっている感じがする。新たに鉄砲玉2個出土。16個となる。
- 25日 17個目の鉄砲玉出土。
平岡勝昭（合志町歴史資料館専門員）氏視察。
- 26日 18個目の鉄砲玉出土。



第1図 田中城跡全体図

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 調査の概要

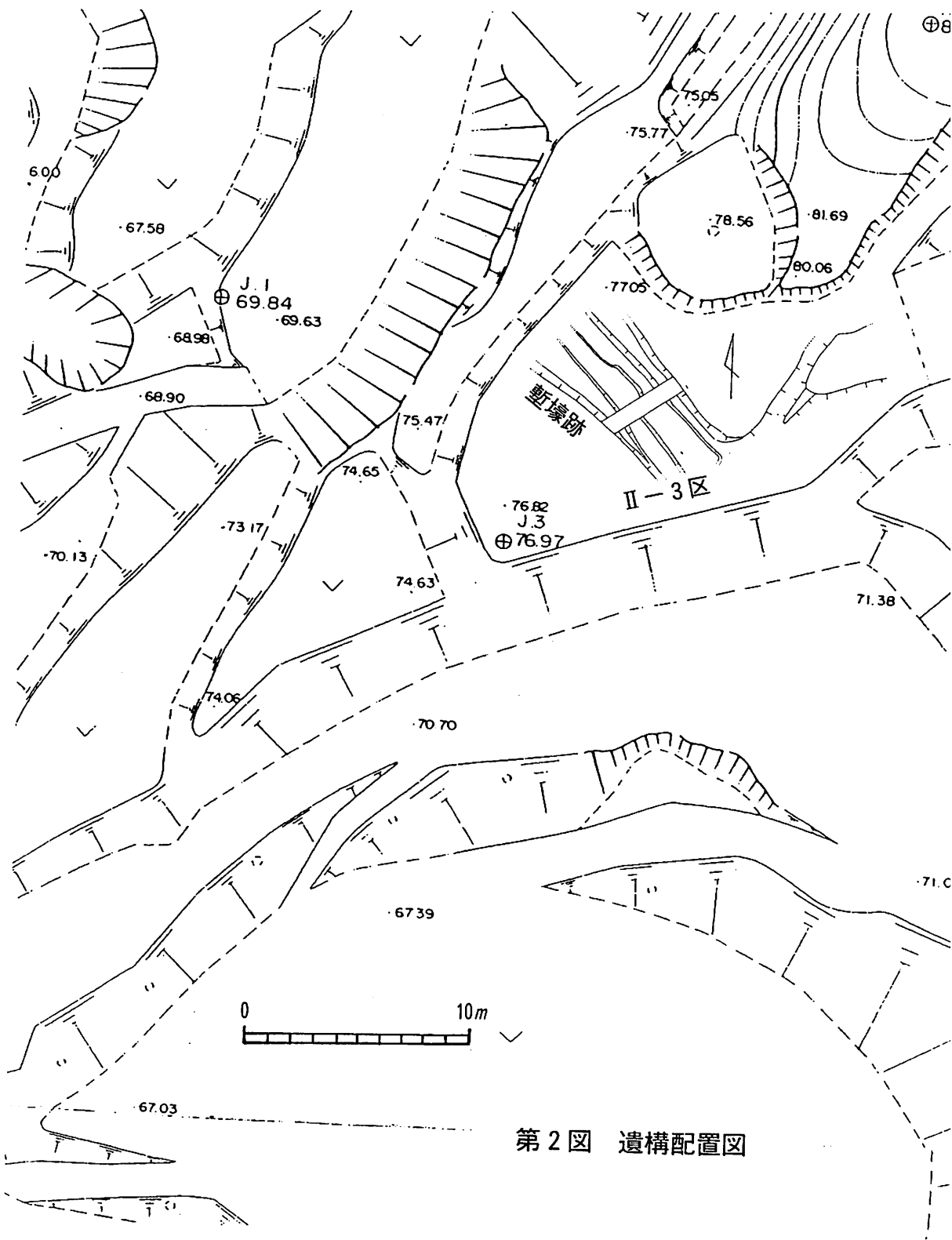
今年度の調査予定地は、主郭の南側裾部に形成された階段状の平場で三段に分かれており、上の方からⅠ・Ⅱ・Ⅲ区として調査を開始した。まず、面積の最も広いⅡ区の表土剥ぎから始めたが、調査工程および排土場の関係から調査区を東側から1・2・3とさらに三分割して行った。

Ⅱ-1区は、東側上部からかなりの崩落が見られ約1mも表土剥ぎを行い、ようやく地山(黄褐色粘質土)が現われた。しかし、この地山も主郭側で幅約1.6mしか確認できず、先端は整地を行って平場を延ばしているように思われた。遺構は、細長く確認された地山に柱穴がわずかに見られるだけであった。そこで、地山の傾斜状態を確認するためにトレンチを二本入れて土層確認を行った。

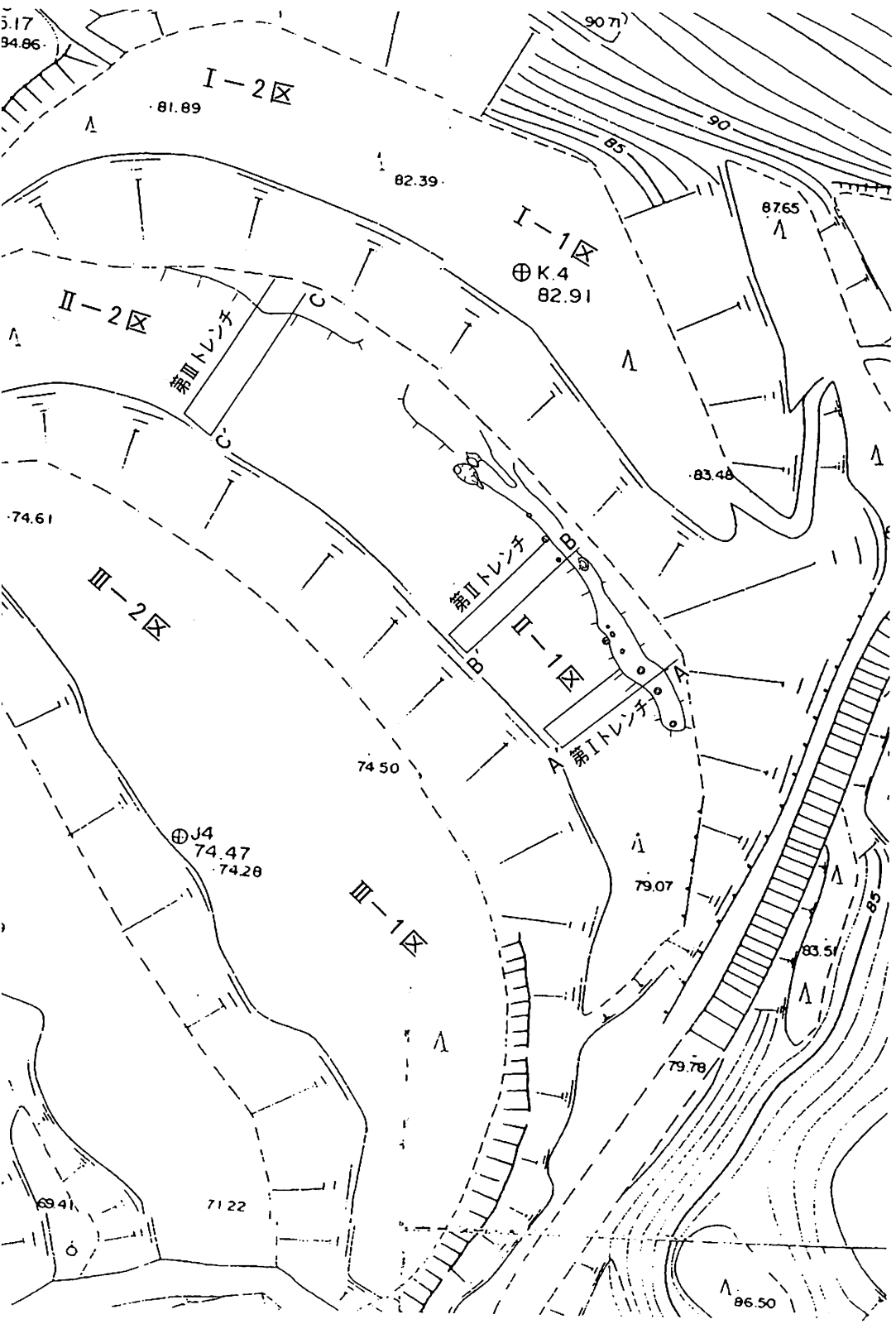
次いでⅡ-3区の調査に移った。この部分は表土が浅く、約20cmも剥ぐと東側半分からは凝灰岩が確認された。しかし、この区からもこれといった遺構の確認はできなかったので、凝灰岩の状態を確認するためトレンチを二本入れることにした。まず、南側のトレンチを掘ると、急傾斜で落ち込み、約50cmの深さで幅約40cmの犬走り状の平坦面が現われ、再び急傾斜で落ち込んでいった。北側のトレンチも同じで、深さ約50cmで犬走り状の平坦面が確認された。そこで、南側のトレンチをさらに延長すると約3m先で凝灰岩が確認され、堀切であることが判明した。さらに掘り進むと、外側にも犬走り状の平坦面が造られており、岩盤の凝灰岩を丁寧に削って造られていることがはっきりした。

Ⅰ区も排土場の関係から二分割して調査を行った。Ⅰ-2区から始めたが、Ⅱ-1区以上に上部からの崩落が激しく、遺構確認面までは1m以上も表土を剥ぐ必要があった。地山はⅡ-1区と同様、黄褐色粘質土であり耕作土が縦方向にスジ状に何本も走っている。はっきり城に伴うと思われる遺構は、確認されなかった。

Ⅱ-2区については、Ⅱ-3区から岩盤に造られた堀切が確認され、専門調査委員に視察をお願いすることになり、しばらく埋め戻しを行わないことにしたので、工程上さらに2と2'に二分割して調査を行った。2からは、Ⅱ-1区からの地山の延長が確認されたが、柱穴などは全く確認できなかった。先端は同様に整地して延ばされているようであり中央部に一ヶ所トレンチを入れて土層の確認を行った。その後2'を調査する予定だったが、3月5日に行った専門調査委員会において、Ⅱ-3区で確認されていた遺構が堀切というよりは、塹壕と判断したが良からうとの指摘を受け、それを確認するためもう少し広範囲の調査を行うことになった。



第2図 遺構配置図



第2節 遺構と遺物

[1 区]

中央部で東西に二分割し、I-1区を排土場としてI-2区の調査を行った。遺構確認面に至るまでに西側の堀切直下においては、約1mも耕作土がのっており、主郭側からの崩落がかなり激しかったことがうかがわれた。遺構確認面となる黄褐色土の地山には、耕作土が何本もスジ状に入っていたが、城に伴うと思われる遺構は確認できなかった。地山も西側に向かってかなり傾斜しており、西隅の主郭側斜面には岩盤の凝灰岩も見られた。

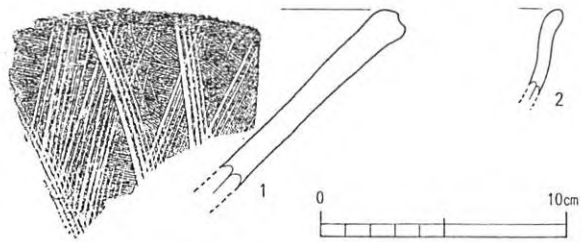
(1) 遺 構

田中城に伴うと思われる遺構は確認できなかった。

(2) 遺 物 (第3・4図)

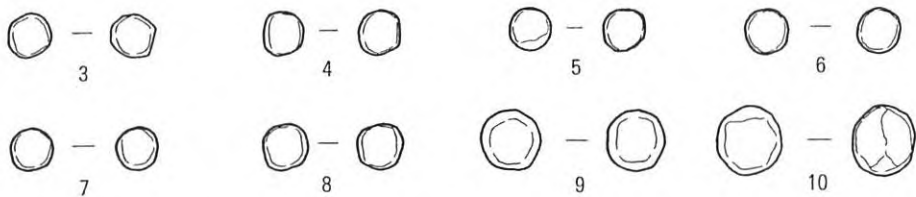
鉛製の鉄砲玉は8個と多かったが、ほかは青磁などの磁器類やすり鉢などの日常品がわずかに出土しただけであった。

1は、瓦質のすり鉢の口縁から胴部にかけてで1mm程の小石を含む。内面および外面上部はハケ、外面下部は指頭による押圧調整で、焼成は良好である。内面に8本単位の条線が斜め方向に施されている。2は、淡い青緑色の釉が全面に薄くかけられた青磁の碗の口縁部である。



第3図 I-2区出土遺物実測図

3~10は、鉛製の鉄砲玉である。3と4は、出土状況を押えられたが、ほかの6コは表土剥ぎの際に出土した。3は径1.11~1.15cm、重さ8.0g、4は径1.11~1.21cm、重さ8.0g、5は径1.05~1.10cm、重さ7.0g、6は径1.16~1.18cm、重さ8.5g、7は径1.10~1.15cm、重さ8.0g、8は径1.19cmの球形で重さ9.5g、9は径1.55~1.57cm、重さ20.5g、



第4図 I-2区出土鉄砲玉実測図

10は径1.71～1.80cm、重さ29.5gである。

[II 区]

当初は三分割して調査を始めたが、作業の段取りからII-2区をさらに二分割したため最終的には四分割したことになった。1～2'区にかけては、黄褐色をした地山が主郭側で幅80～160cm見られ、その地山で柱穴が確認された。また、3区からは岩盤の凝灰岩を削って作られた塹壕跡および通路と思われるくぼみも確認された。

(1) 遺構

① 柱穴

II-1区の主郭側で確認された、黄褐色をした地山で11個が検出された。大きさは、長径11.5～49.5cm、短径9.0～29.0cmで平均23.3×18.6cm、深さは9.1～26.3cmで平均16.6cmである。

② 塹壕跡(第5図)

上幅3.60m、下幅56cm、深さ1.40mで、主郭から延びる丘陵を断ち切るように造られている。内側(主郭側)は、凝灰岩の確認面から約50cm下がったところに幅約40cm、高さ約35cmの段をつけ、約1.4mの平坦面を設けてからさらに約40cmの段をつけて底になる。外側も同様に凝灰岩の確認面から約60cm下がったところに幅約50cm、高さ約40cmの段をつけ底に達する。遺構の外側は、丁寧に整形され平坦になっている。

③ 通路跡?

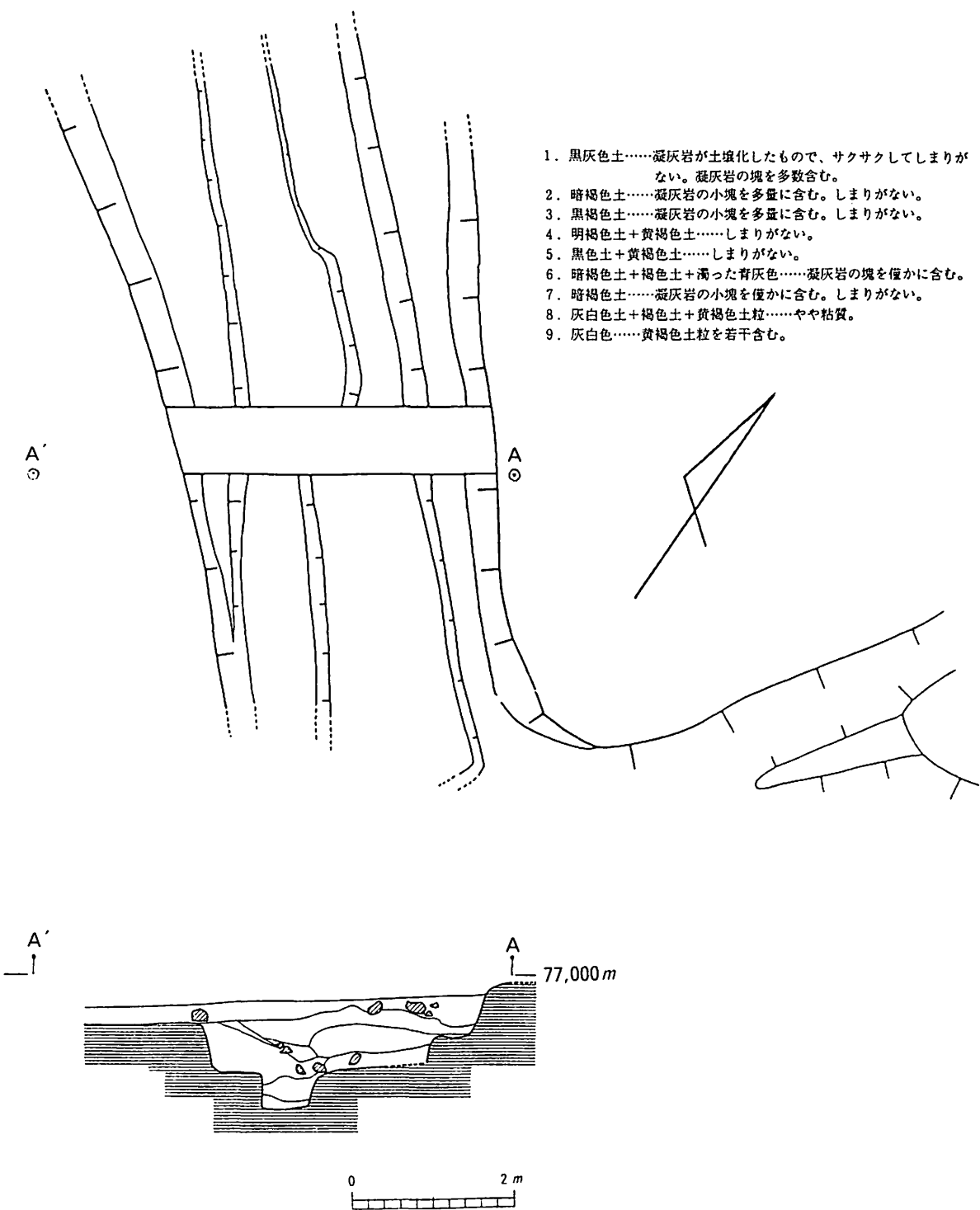
3区の東側で確認された凝灰岩の岩盤で、南北方向と北東-南西方向に走る二本の溝状に続く遺構が確認された。南北方向に走る方は、幅約70cm、深さ約50cmで約3m続いている。底部には、約30cmの大きさのくぼみが、ほぼ歩幅間隔(約60cm)で確認された。また北東-南西方向に走るものも約35cmの大きさのくぼみが底部で確認された。二本の遺構は合流して、塹壕跡へと続いている。いずれも未調査区へと延びており、特に南北方向に走る遺構は尾根筋に沿って主郭部へ続いている可能性も考えられるので、延長を確認する必要があるようだ。

(2) 土層(第6図)

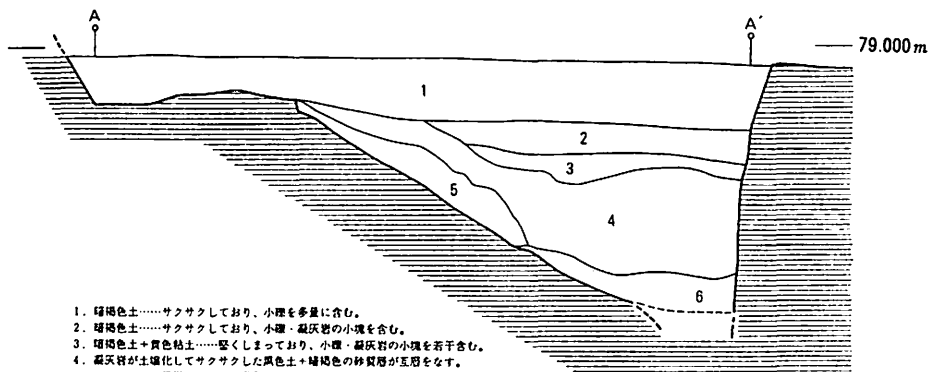
II-1・2区では地山が主郭側80～160cmしか確認できず、先端部は整地されていると思われたため、3本のトレンチを入れて土層確認を行い、またII-3区では岩盤の凝灰岩の落ち込み状態を確認するためにトレンチを入れた。

① Iトレンチ

表土を約30cm剥ぐと主郭側約1.6mで地山の黄褐色土が確認され、傾斜しながら下段へと落ち込んでいる。埋土は、全体的に凝灰岩の小塊を含んでおり、特に斜面部では層をなしている。

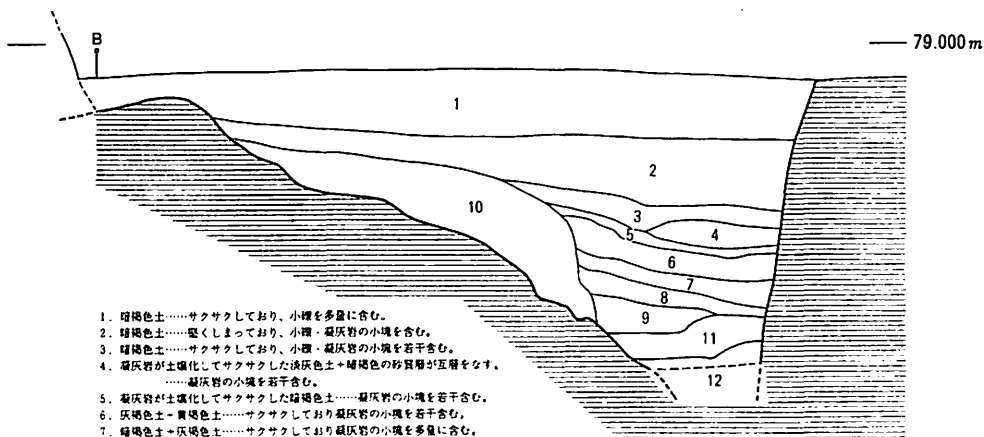


第5図 塹壕跡実測図



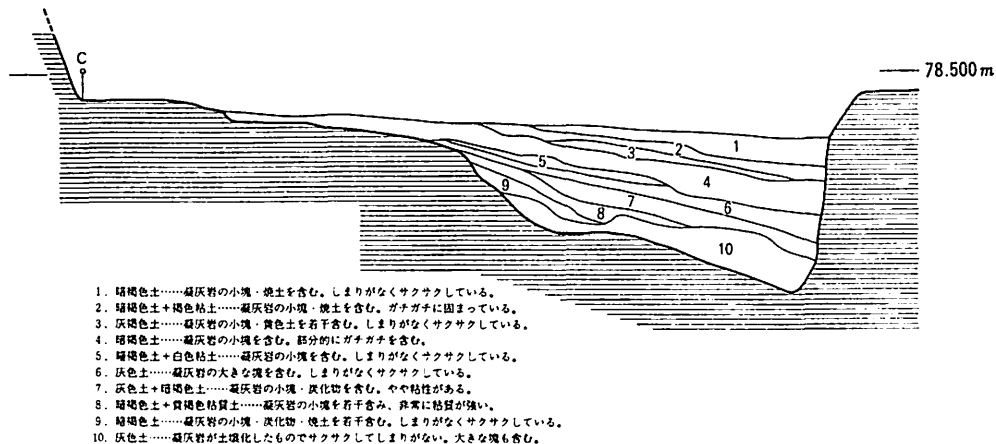
1. 暗褐色土……サクサクしており、小礫を多量に含む。
2. 暗褐色土……サクサクしており、小礫・凝灰岩の小塊を含む。
3. 暗褐色土+黄白色粘土……堅くしまっており、小礫・凝灰岩の小塊を若干含む。
4. 凝灰岩が土壌化してサクサクした淡灰色土+暗褐色の砂質層が互層をなす。
……凝灰岩の小塊を多量に含む。
5. 淡灰色土……凝灰岩の小塊がギッシリと詰まって層をなしている。
6. 黄白色粘土……粘性が非常に強い。

I トレンチ



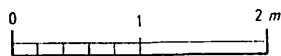
1. 暗褐色土……サクサクしており、小礫を多量に含む。
2. 暗褐色土……堅くしまっており、小礫・凝灰岩の小塊を含む。
3. 暗褐色土……サクサクしており、小礫・凝灰岩の小塊を若干含む。
4. 凝灰岩が土壌化してサクサクした淡灰色土+暗褐色の砂質層が互層をなす。
……凝灰岩の小塊を若干含む。
5. 凝灰岩が土壌化してサクサクした暗褐色土……凝灰岩の小塊を若干含む。
6. 灰褐色土+黄白色粘土……サクサクしており凝灰岩の小塊を若干含む。
7. 暗褐色土+灰褐色土……サクサクしており凝灰岩の小塊を多量に含む。
8. 淡灰色土……サクサクしており凝灰岩の小塊を若干含む。
9. 凝灰岩が土壌化してサクサクした淡灰色土……凝灰岩の小塊を若干含む。
10. 凝灰岩の小塊がギッシリと詰まって層をなしている。
11. 凝灰岩が土壌化してサクサクした淡灰白色土+黄白色粘土……凝灰岩の小塊を若干含む。
12. 凝灰岩が土壌化してサクサクした淡灰白色土+黄白色粘土……凝灰岩の小塊を多量に含む。

II トレンチ



1. 暗褐色土……凝灰岩の小塊・焼土を含む。しまりがなくサクサクしている。
2. 暗褐色土+褐色粘土……凝灰岩の小塊・焼土を含む。ガチガチに固まっている。
3. 灰褐色土……凝灰岩の小塊・黄白色土を若干含む。しまりがなくサクサクしている。
4. 暗褐色土……凝灰岩の小塊を含む。部分的にガチガチを含む。
5. 暗褐色土+白色粘土……凝灰岩の小塊を含む。しまりがなくサクサクしている。
6. 灰褐色土……凝灰岩の大きな塊を含む。しまりがなくサクサクしている。
7. 灰褐色土+暗褐色土……凝灰岩の小塊・炭化物を含む。やや粘性がある。
8. 暗褐色土+黄褐色粘質土……凝灰岩の小塊を若干含む。非常に粘質が強い。
9. 暗褐色土……凝灰岩の小塊・炭化物・焼土を若干含む。しまりがなくサクサクしている。
10. 灰褐色土……凝灰岩が土壌化したものでサクサクしてしまりがなく、大きな塊も含む。

III トレンチ



第6図 I～III トレンチ土層断面図

② II トレンチ

I トレンチ同様、表土を剥ぐと主郭側約80cmで地山の黄褐色土が確認され、傾斜して下段へと落ち込む。埋土も似通っており、全体的に凝灰岩の小塊を含んで、斜面部では層をなしている。層は、ほぼ水平に堆積しており人為的に整地されたようである。

③ III トレンチ

これもI・II同様、全体的に凝灰岩の小塊を含んでいる。層は、ほぼ平行に走っており暗褐色土が主で、サクサクして締まりがないものと強く締まったものが互層をなすように堆積している。再下層は凝灰岩が土壌化してサクサクしたものが厚く堆積している。

④ IV トレンチ (塹壕跡・第5図)

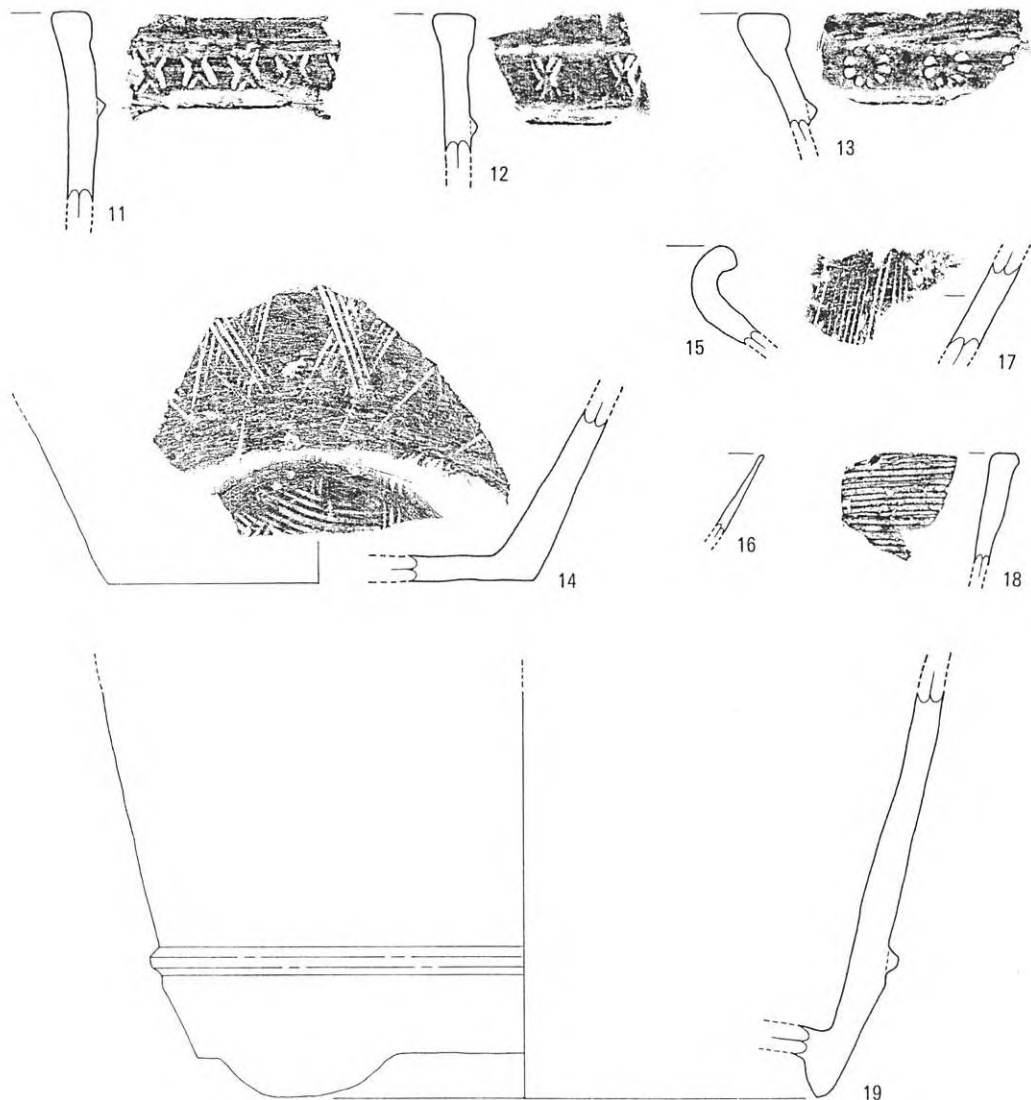
結果的には、塹壕跡と思われる遺構を確認したことになった。埋土の状態を観察すると、この塹壕を一時に埋めてしまったように思われる。底部から段までの間は、灰色がかった粘質土をブロックで投げ込んだような状況であり、その上部は暗褐色土が外側から斜め方向に埋まっている。外側の縁に設けられていた土塁をつぶして埋めたのかもしれない。内側の埋土はほぼ水平に堆積しており、最後に凝灰岩が土壌化してサクサクした黒色土で全体を均しているようである。全体的に凝灰岩の大きな塊が見られる。

(3) 遺物 (第7・8図)

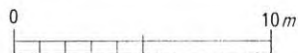
青磁・染付・すり鉢・火舎などの小片のほか、II-1区から4個、II-3区から6個の鉛製の鉄砲玉が出土した。

11~16は、II-2区からの出土である。11は、瓦質の火舎の口縁部から胴部にかけてでやや丸味を帯ている。内・外面ともナデ調整で、胴部には断面三角形の突帯が一条貼り付けられており、口縁部との間にX文の刻印が施されている。12も瓦質の火舎の口縁部から胴部にかけてで、内・外面ともナデ調整である。胴部に断面三角形に突帯を一条貼り付け口縁部との間にX文の刻印が施されている。13も瓦質の火舎だが、胴部がかなり広がっているように思える。外面には断面三角形の突帯が一条貼り付けられており、口縁部との間に花文が刻印されている。内・外面ともナデ調整。14は瓦質のすり鉢の底部で推定底径16.8cm、現存高6.2cmを残す。内面はナデ、外面は指頭による押圧調整で、内面には5~8本単位の条線が施されている。底部からの立ち上がり部分は、よく使い込まれておりかなり磨耗している。15は壺の口縁部である。内・外面ともナデ調整で、火を受けており赤褐色をしている。16は、内・外面に淡い青緑色の釉が全面に薄くかけられている青磁碗である。器壁が非常に薄く、丁寧な作りである。

17~19はII-3区からの出土で、17は瓦質のすり鉢の胴部片である。内面ナデ、外面指頭による押圧調整で、内面には7~8本単位の条線が施されている。18は瓦質の鉢の



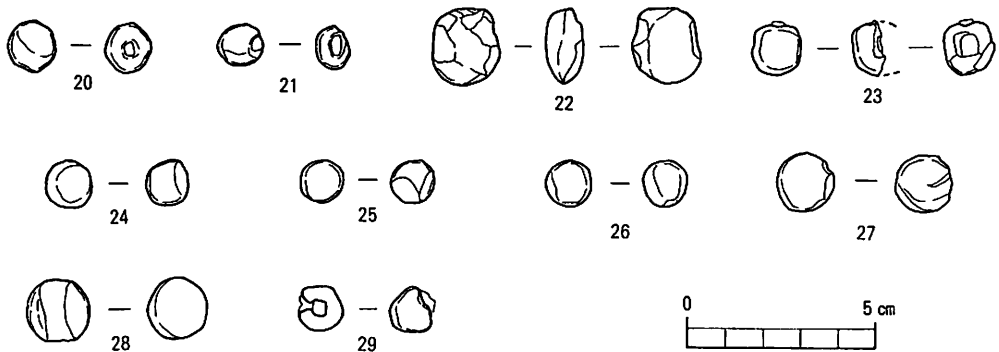
第7図 II-3区出土遺物実測図



口縁部と思われる。内・外面ともナデ調整であるが、内面にはヘラ状工具の痕がくっきりと残っている。19は瓦質の火舎の底部である。推定底径23.8cm、現存高15.7cmを残し、三脚を持っていると思われる。内・外面ともナデ調整で、外部に断面台形の突帯が一条貼り付けられている。

20～23はII-1区、24～29はII-3区から出土した鉛製の鉄砲玉である。20は径1.21～1.31cm、重さ8.5gで穴があいており中は空洞である。21は径1.07～1.10cm、重さ3.5gで何かに当って二つに折れ曲ったようにも思える。22は径1.72～2.00cm、重さ17.5gで何かに当って平たく潰れている。23は径1.20～1.41cmで半分から割れており、重さ4.0g。24は径1.18～1.22cm、重さ8.5g。25は径1.11～1.13cm、重さ7.5g。26は1.14～1.26cm、重さ9.0g。27は径1.49～1.57cm、重さ18.0g。28は径1.64～1.69cm、重さ25.0g。29は

径1.12～1.16cm、重さ6.5gで中は空洞になっている。



第8図 II-1・3区出土鉄砲玉実測図

第三章 ま と め

主郭部から南および南西方向に二本の尾根が延びており、その間に広めの平坦部が形成されている。下方には、平成7年度に調査を行った「弾正屋敷跡」と呼ばれている平場があり、今年度は最も主郭よりにある平場の調査を実施した。

調査を予定していたのは、最奥部に当る主郭よりに形成された三段であったが、予想以上に上部からの崩壊があってかなり堆積して表土が厚く、予定の半分しか調査できなかった。主郭側からⅠ・Ⅱ区としたが、例年通り排土場の関係でⅠ区を二分割、Ⅱ区は四分割しての調査となった。

Ⅰ区は、主郭側からの崩落が特に激しくて表土が約1mもあり、西側の半分だけの調査だったが、遺構は全く確認できなかった。段落ち部から約1m手前までは、地山が確認され、先端部のみ整地されているようである。

Ⅱ区は、調査の段取りから2区をさらに二分割したが西側の調査が残ってしまった。1～2区にかけては、主郭側約1m部分でのみ地山が確認され、先端部は整地されていることが確認された。Ⅰ-2およびⅡ-1・2区の地山の確認状況から、旧地形はかなり急傾斜だったことがうかがわれ、今年度の調査区の平坦面を造り出すためにかなりの削り、整地作業が行われたことが推定された。このことは、土層確認のために入れた三本のトレンチの観察からもいえる。1区の地山からは柱穴が確認され、柵列が立てられていたことも推定できるが、2区では確認できずはっきりした性格を捉えるまでには至らなかった。Ⅱ区の平場は、主郭から南西方向に延びる尾根まで続いており、この部分を3区として調査を行った。表土を剥ぐと1・2区と異なり、東側半分で岩盤の凝灰岩が確認された。凝灰

岩が確認できなかった西側で、凝灰岩の落ち込みを確認するためにトレンチを入れたところ両側に段を持つ堀切状の遺構が確認された。3月5日に専門調査委員会を開催し、現地では検討してもらったところ、底部が平らであること、平場の中央部に造られていること、両側に段を持つことなどから堀切というよりは塹壕跡と考えた方が良さそうだが、確認するためにもう少し広範囲を掘ってもらいたいとの指摘を受けた。そこで土層観察部分を残して全面を掘り下げたところ、南側では下段部分は掘り切られていないことが分かった。さらに、段部分については内側（主郭側）では南側が広くて北側にいくにしたがって狭くなり、また、外側では逆に南側で狭くて北側にいくにつれて広く造られていることも確認された。東側で確認された岩盤の凝灰岩の中央部および南側には、溝状のくぼみが見られた。当初は、水道か何かで抉られたのだらうと考えていたが、これについても調査委員会の折りに塹壕から主郭部へとつながる通路ではないかとの指摘を受けた。底部には、ほぼ歩幅間隔でくぼみが残っており、主郭から延びる尾根に沿って続いているように思えるため、来年度調査を行い確認することにした。

遺物については、例年通り青磁・染付・火舎・すり鉢などの小片が出土したが、鉛製の鉄砲玉が18個出土したことは特筆できる。

玉の大きさには数種類あり、三島市教育委員会刊行『史跡山中城跡』に記載されている「井上流近要集」による玉割表で分類すると二匁玉3個、二匁五分玉8個、三匁玉2個、五匁五分玉1個、六匁玉1個、七匁玉1個、八匁玉2個となり、三匁玉以下の玉が主として使用されていたようである。口径でいくと10.944mm・11.790mm・12.529mm・15.335mm・15.788mm・16.620mm・17.374mmと7種類の鉄砲が使用されていたことになるが、中心となるのは口径12.529mm以下の鉄砲ということになる。重さは、三匁玉以下の12個（1個は半分欠損のため除外）の平均で7.7g、三匁玉以上の5個の平均で22.1gである。

昨年度までの調査でも15個が出土しており、今年度分を加えると一気に33個と倍以上の出土となった。平成4年度に調査して連棟式建物跡が確認された地区からも8個が出土しており、城の西側から合計で29個が出土したことになる。これは、西側を中心に調査を行っているからとは思うが、田中城が西向きに造られた城であり、国衆一揆の際の攻めて側の総大将である小早川秀包が西側に陣取っていることも影響しているのではなかろうか。3月5日に実施した専門調査委員会において、これまでの調査は西側に集中していたが全体的に見ると調査区にバラツキがあり、点としての遺構の確認に留まっているとの指摘があり、今後はこれまでの調査区の間を埋めるような感じで調査を行って欲しいという要望が出された。まず、手始めとして今年度確認された通路と思われる遺構の延長の確認が上がり、その後は主郭周辺曲輪・空堀・北の監視台と調査を進め、各遺構を面としてとらえてつながりを確認し、田中城の全体像の解明を急ぐことになった。

圖 版

(1) 調査地遠景
(南西より)



(2) I区調査前
(南東より)



(3) I-2区表土除去状況
(南東より)





(1) II区調査前
(南東より)



(2) II-1区遺構確認状況
(南東より)



(3) II-1区遺構発掘状況
(南東より)

(1) II-3区岩盤確認状況(北より)



(2) II-3区遺構発掘状況(北東より)



(3) 塹壕跡東半分発掘状況(北西より)



(4) 通路跡?発掘状況(北より)

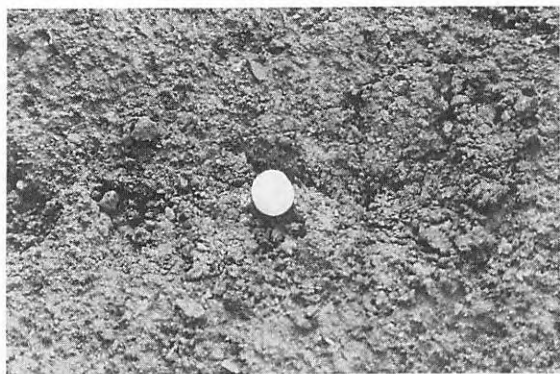




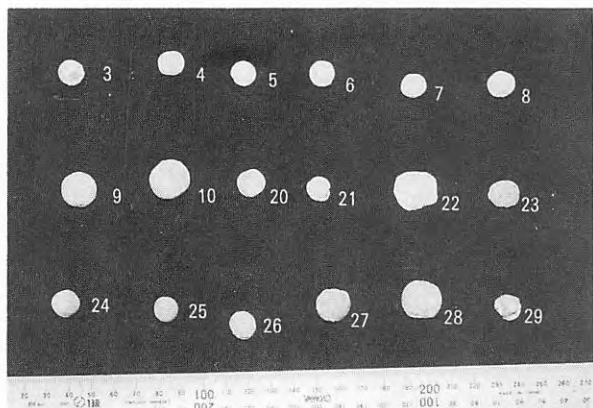
(1) 投弾? 出土状況



(2) すり鉢出土状況



(3) 鉄砲玉出土状況



(4) 出土鉄砲玉

報 告 書 抄 録

ふりがな	たなかじょうあと							
書名	田中城跡Ⅻ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三加和町文化財調査報告							
シリーズ番号	第14集							
編著者名	黒田裕司							
編集機関	三加和町教育委員会							
所在地	〒861-0992 熊本県玉名郡三加和町大字板楠76 TEL0968-34-3111 内線55							
発行年月日	西暦 1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たなかじょうあと 田中城跡	くまもとけんたまなくん 熊本県玉名郡 みかわまちおおあぎ 三加和町大字 わにあぎふるしろ 和仁字古城	43366		33度 4分 31秒	130度 35分 53秒	19971001 ～ 19980331	約900	整備に伴う 範囲および 遺構の事前 確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
田中城跡	城館	戦国時代 末期	塹壕跡・連絡用通路跡?・柱穴	青磁・染付・火舎・すり鉢・土師器などの小片。 鉛製鉄砲玉 18個		塹壕跡および連絡用通路と思われる遺構が確認された。特に通路は、『辺春・和仁仕寄陣取図』で主郭部分から延びている線に対比できる可能性がある。また、鉄砲玉が多数出土。		

三加和町文化財調査報告書 第14集

田 中 城 跡 XIII

1998年3月31日

発 行 三 加 和 町 教 育 委 員 会
〒861-0992

熊本県玉名郡三加和町板楠76

印 刷 熊 本 県 印 刷 セ ン タ ー 協 業 組 合
〒862-8011

熊本市鹿埴瀬町496-1

この電子書籍は、三加和町教育委員会が発行した『三加和町文化財調査報告 第14集 田中城跡 第13巻』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

菊水町と三加和町は、西暦2006年に合併して和水町となりました。調査記録及び出土遺物は、和水町教育委員会が保管しています。

書名：三加和町文化財調査報告 第14集 田中城跡 第13巻

発行：和水町教育委員会

〒861-0913 熊本県玉名郡和水町板楠76番地

TEL 0968-34-3047

電子書籍製作日：2024年2月28日